

## 会 議 録

会議の名称	平成 23年度 第3回豊中市図書館協議会		
開催日時	平成24年（2012年）2月28日（火）14時～16時30分		
開催場所	岡町図書館 集会室	公開の可否	㊦・不可・一部不可
事務局	生涯学習推進部 岡町図書館	傍聴者数	2人
公開しなかった理由			
出席者	委員	舟岡直子 高橋孝子 島野昌子 鶴川まき 塩見昇 松田美和子 中川幾郎 村上泰子 曾谷昌	
	事務局	岡町図書館長 千里図書館長 岡町図書館主幹 岡町図書館副館長 岡町図書館副主幹	
	その他		
議題	1. 平成24年度の事業計画について 2. 外部評価について（平成24年度実施予定） 3. 「とよなかブックプラネット事業」中間報告 4. その他		
審議等の概要 （主な発言要旨）	別紙のとおり		

平成23年度（2011年度）第3回図書館協議会

日時：平成24年（2012年）2月28日（火）14時～16時30分

場所：豊中市立岡町図書館 3階集会室

出席者：（敬称略）

委員 舟岡 高橋 島野 松田 鶴川 中川（委員長） 村上 塩見 曾谷

事務局 古川 北風 山本 内田 中田 江口 須藤 松井

開 会

資料確認

委員（欠席者）の紹介

●委員長

議事次第の1、平成24年度事業計画について事務局からの説明をどうぞ。

●事務局

平成24年度の事業計画についてですが、現在主要な事業については、ちょうど議会が開かれ予算審議がされているところである。読書振興課としては、次年度3つの事業を計画し提案している。一つが「とよなかブックプラネット事業」、それから岡町図書館の耐震化事業、そして最後に豊能三市二町の広域利用サービスに関する事業である。一つ目の、学校図書館の活性化に向けた「とよなかブックプラネット事業」については後ほど詳しく報告をさせていただき、ご議論をお願いしたいのでここでは省略させていただきたい。

二つ目の岡町図書館の耐震化事業については、岡町図書館は昭和44年に旧の耐震基準で建築されており、昨年度耐震診断を行ったところ、診断強度を示すIS値が0.24と一般的に必要と言われている0.6以下と測定されたため、今年度耐震設計を行っている。次年度はその設計に基づき出来るだけ早く耐震強度を高める工事を行いたいと考えている。それから三つ目の豊能三市二町の広域利用サービスの事業については、近隣自治体との広域連携については平成4年に北摂三市、吹田市・豊中市・箕面市の間で資料の相互貸借に関する協定を締結し、定期的な巡回車による物流環境を確保して、より広範な資料提供を可能にしてきたところであるが、平成15年には市民が直接他市の図書館を利用するという、広域利用サービスを箕面市との間で試行実施した。市民の皆さんからは、図書館利用が非常に身近になったと好評を得ている。今年度の経験から、図書館の広域利用については、単に図書館利用の利便性が上がるというだけではなくて、利用者が他市の図書館を相互に利用するということで、地域での経済効果や、文化交流の機会についても期待ができるということも見えてきた。ちなみに箕面市との場合においては「北摂アーカイブス事業」のように、豊中市と箕面市の市民による広域的な協働事業も可能になったという実績がある。これらをふまえて昨年5月からは、以前から要望があった、吹田市との広域利用サービスの実施にも踏み切ったという経過になっている。今回は豊能地区の豊中、箕面、池田、豊能、能勢の三市二町の枠組みで、阪神地区と同様に全面的な広域利用を試行するということがコンセプトになっている。豊能地区の市長と町長により、連絡会議の場で以前から提案されてきた事案ではあったが、関係自治体の図書館の中でこれまで検討を重ねてきて、平成24年度6月以降であれば実施の見通しが立つということになり、3年間の試行期間を設けて、あわせて進行を見守る意味で連絡会を設けながら全面実施を行うとするものがある。具体的なサービス内容については、箕面市・吹田市と行っているのと同様、つまり

貸出冊数は5冊で、予約等は受け付けない。ただし今回は町が2つ入っているので、町に関しては1度に3冊までという内容を想定している。その他AV資料をどうするかとか、サービスの詳細については、まだ調整中である。ちなみにこの近辺では、阪神地区の7市1町、尼崎・西宮・芦屋・伊丹・宝塚・川西・三田市・猪名川町とか、北河内地区の7市、交野・枚方・寝屋川・四條畷・大東・門真・守口等でも同様の広域利用が実施されている。また大阪市との関連では、大阪市との隣接都市協議会6市というのがあり、門真市・大東市・東大阪市・八尾市・松原市・堺市、それらと大阪市という枠組みとなっている。こちらの場合は、大阪市立図書館とそれぞれの図書館が相互に協定を結ぶ形なので、全ての図書館を利用できるということではない。隣接という意味では豊中市と吹田市も大阪市の隣接しており、一応現在もこの隣接協議会のメンバーにオブザーバーとして入っているが、それら6市のような協定の形では入っていない。相互利用から、将来に向けては相互連携・広域連携を目指しながら、このサービスについては考えていきたいと思っている。現在の豊中市の広域利用状況、ならびに広域の図書館状況について、本日配布資料のデータに基づいて引き続きご説明申し上げる。

#### ●事務局

本日ご用意した資料をもとにご報告させていただく。豊中三市二町の広域連携、広域利用の資料としては、図書館協議会で以前ご討議いただいた意見書および提言、平成14年図書館協議会の意見書「豊中市立図書館における広域利用について」と平成17年図書館協議会の提言「これからの豊中市立図書館の運営のあり方について」である。後者で広域についてふれられているところは、4ページの7の「近隣自治体等との広域連携」という箇所と、6ページ2の1の3「図書館の広域サービスについて」の2カ所に記述がある。

そしてA3の1枚もので、平成22年度の大阪府内公共図書館相互協力の実績表である。この表の数値については、大阪公共図書館協会（通称OLA）の相互協力委員会が各市からデータを集め、何度かの確認作業を経て整理したものである。何度も確認をしてまとめられてはいるが精度100%とは言い切れないところがあり、大阪府内の全体状況を見るような意味でご覧いただきたい。

公共図書館では図書館サービスを行なう上で、以前からこのように図書館ネットワークを活用して、資料提供やレファレンス、研修や情報共有などを行なっている。この相互貸借の統計表の中には、府立図書館資料と府内各市の相互貸借資料も含めて、大阪府立図書館から毎週1回各市の図書館に申込資料が届く、府立の協力車によるものとか、豊中・吹田・箕面の三市が互いに定期的に運行している連絡便で貸借するもの、そして大阪市立中央図書館に各市が申し合わせて相互貸借資料を交換し合うもの、その他郵送で貸借するものなど、それら全てをこの表には含んでいる。表を印字する時に文字がずれてしまったが、左から縦に各市の名前が並んでいるところは、大阪府立図書館、大阪市と順に縦に並んでいるのが貸出館である。左から右に向かって大阪府、大阪市と順に並んでいるのが資料を

借り受ける方、借受館の名前である。借受館の方の豊中市の欄を縦に見ると、豊中市立図書館は大阪府立図書館に平成22年度3,016冊借り受けた、大阪市からは881冊借り受けた、箕面と吹田からは三市間の便で707冊、799冊借り受けた、茨木・枚方・堺からは大阪市立中央でドッキングして、このような冊数借り受けたということが読めるようになっている。縦に並んでいる貸出館の豊中市の行を左から右に見ると、豊中市立は大阪府立に162冊貸出をした、大阪市立に454冊、箕面市・吹田市には1,102冊・1,250冊貸出した等々が読める表になっている。これで府内全体の概況を見ていただけたらと思う。ネットワークで協力関係を結ぶという意味で、以前から資料面ではこのような相互協力をしている。

次にA4の1枚もの2種類の資料のうち1つは、上半分が「豊中市箕面市図書館広域利用状況」となっており、下半分が「豊中市吹田市図書館広域利用状況」を表している。現在広域利用を試行している箕面市・吹田市との間で、どのように利用されているか見ていただける資料である。箕面市との広域利用は、平成15年から蛍池と萱野南で試行が始まり、平成18年に千里と西南を追加し、現在に至っている。当初は箕面市民より豊中市民の側の利用が多く、1.5倍という状況もあったが、広域利用対象館の拡大があり、1.3倍とに落ち着いてきている。吹田市との広域利用については、両市の3館ずつを広域利用館として、今年度4月までを事前登録期間とし、5月から試行開始し半年以上経過し、吹田市民の方が約3倍多く利用されているという状況である。また、今申し上げた広域利用以外にも、各館が必要に応じて行う隣接地域へのサービスがある。この数字は本日の資料としてご用意していないが、蛍池図書館では池田市空港町の方を対象として、年間2千冊程度の利用がある。一方箕面市立西南図書館でも隣接地域の豊中市民へ年間2万1千冊ほどの貸出がある。広域利用と隣接を合わせて、豊中市は年間5万冊ほどを他市の利用者へ直接貸出しており、豊中市民もこれら他市の図書館を同じくらい利用されており、この他にも資料の貸出以外に閲覧等のご利用も従来から行われている、というのが広域と隣接の現状である。

そしてA4のもう一つの資料は、平成22年度豊能3市2町図書館データというタイトルにしているが、やはり大阪公共図書館協会が毎年まとめている基礎データをもとに、各市のHPから拾える数字を加えたものである。豊能地区の各自治体の公共図書館の概況を一覧して見ていただけるかと考えた。ただ、精度を含め粗っぽい仕上がりで本日はお出ししているため、ご了承をお願いしたい。

平成24年度に予定している豊能三市二町の広域連携・広域利用の話は、もともとは箕面森町（みのおしんまち）へのサービスをめぐり、箕面市と豊能町の間で個別に協議が行われたことに端を発している。箕面市と豊能町の間だけでは解決が困難なことから、豊能三市二町の広域連携の枠組みで、豊能地域全体で課題の解決をはかろうという展開になったものである。

## ●委員長

それでは平成24年度に向けた事業の説明及び資料説明について、何かご質問ご意見をいただきたいと思う。マイクをまわし順番にご発言していただくということによろしいか。

●委員

こちらの豊能3市2町図書館データ平成22年度という資料を見ると、これで見るとやはり人口や面積面で豊中市と参考データの吹田市は非常によく似通っているのかなと思うが、ただ差が明らかだと思ったところが、受け入れ冊数の違いで、豊中市が4万7千冊、吹田市が9万6千冊ということで、結構大きな開きがある。図書購入費については6千4百万と6千8百万ということであまり差はないのに、年間の受け入れ冊数に開きがあるのが気になったが、どういうことだろうか。

●事務局

吹田市では山田の図書館とか、最近相次いで新館建設が行われている。そのために一般の年の通例の図書費だけではなくて、事業費予算で買われる初度の分も含まれていると理解している。

●委員

三市二町で広域連携を始められるということだが、借り方貸し方にもいろいろあると思うので、そのへんのアンバランスについてはどんな風に考えているか。

●事務局

実は箕面市と最初に広域利用を始めた時は、単純に貸出冊数上でバランスが崩れてしまうほどあまりにも格差が大きいということであれば、その分を自治体同士で対価で清算するというようなことも検討したが、実際に三市二町の枠組みの中で言えば、自治体の規模も様々であり、図書館の館数にしても人口に比例してやはり差があるのも事実である。我々としては、貸出だけで広域連携を考えてしまうと、パートナーとして組める相手が限定されてしまうと思っている。むしろ先ほど箕面の話があったが、生活圏の中にある複数の市町村をまとめて地域全体の資料としていかに共同の資料群を作り上げていくのかという視点に立ちたい。そのような価値も含めて、こういった広域連携というものを考えていかないといけないのではないかと思う。今、仮に図書館数が少ない自治体の住民であっても、たとえ当初は他市の図書館でも、それを使っていただいて、図書館サービスを理解していただければ、やがてまた地元でも身近に必要であるという、そのような動きにつながるのではないかと期待をしている。

●委員

数字を見て今すぐ意見を出すというのは少し難しいのだが、広域事業については本当に

一つ一つの積み重ねがあって、すごく目に見えないところまでの努力が積み重なって成り立つものであると思う。子ども文庫の私達としても本当に凄いなと思って見ている。広域連携で、いろいろなところの図書館が使えるということ、どんどんPRしてほしい。豊中子ども文庫連絡会の中でも、利倉にある文庫では子どもさんが集まってすごい大盛況となっている。文庫として大盛況ということはいいことであるが、図書館の広域連携・広域利用が始まっていることを多くの市民に伝えることも、子どもの読書環境を整える上でも大事だと思う。広域利用が成立したら、その都度もっとPRしていただければ、読書環境の整備につながると思う。私達も協力するので頑張ってほしい。

●委員長

3市2町の中で、たとえば能勢町は個人登録者数が不明、館数も一室となっているが、これは条例設置の図書館ではないのか。

●事務局

これは公民館図書室である。

●委員

広域利用で、豊能地区の各自治体の図書館事業が、広域利用の図書館協力でどうなっていくのか気になる。豊中は大阪に向かって人々が出てきて通っていくところだろう。そういう意味では、豊中の図書館をよく使われることが多くなると想像されるということだが、それはそれでいいのではないか。ただ能勢町の図書館活動の先行きみたいところが、数字上からは気になった。

●委員長

私からも質問を一つ。隣接自治体との広域利用は、「豊中市の図書館活動」等の統計上では、市民一人あたりの貸出冊数などの中に算入されてくるのか。どう切り分けされるのか。

●事務局

今は入っていない。他市から借用した資料を豊中市立図書館を通して貸出している場合は、貸出としてカウントしている。他市の図書館から借用したものを貸出する場合は個人への貸出として捉え、他市の図書館に貸出したものは、団体貸出として把握している。

●委員長

了解した。自治体同士の協力が盛んになることは望ましいことだが、盛んになったことが成績として評価されるべきだと思う。成績として評価されるように、数値的処理ができるのか気になったが、そこは大丈夫か。

●事務局

自前のシステムの方にはなかなか数字が反映されないが、それは広域連携内の自治体同士で情報交換をしながら、それぞれの数値を取っていくことはできるので、できるだけ反映していくようにしたいと思う。

●委員長

了解した。感想であるが、3市2町のデータを見てみると、豊中の図書館が財政的に苦勞しているのが見えてくる。個人登録者人数も貸出冊数も多く、ちゃんと頑張っているのだが、肝心の受け入れ冊数とか購入冊数や図書購入費などを人口を基礎に考えると、粗っぽく見れば池田市の約4倍と箕面市の約3倍だと考えればいいということだが、かなり切り詰めて頑張ってやっているということだと思う。

それでは続いて議題の2、平成24年度実施予定の外部評価について、事務局からの説明を。

●事務局

次年度予定している外部評価についてその実施方法と、同じく次年度に予定している「市民アンケート」並びに「来館者アンケート」について、事務局から報告と提案をさせていただいて、それについてご議論いただきたい。お手元の資料のなかに評価に関する資料がいくつかあるが、それと前回のアンケート調査に関する資料、それらを参考によりしくお願いしたい。

●事務局

続いて、次年度予定している外部評価について、その実施方法、および同じく次年度に予定している市民アンケート並びに来館者アンケートについて、事務局から報告と提案をさせていただき、ご議論いただくようお願いする。お手元の資料の中に、評価に関する資料をいくつか配布させていただいたが、あわせて前回実施したアンケート調査に関する資料等を参考に、議論をお願いしたい。さらにリーディング項目に関する評価表は、前回の協議会のお出しした案には1箇所確定した数値が入っていなかったため、今回の資料を完成版としてHPでも公開をしたところであり、ご了解いただきたい。評価検討委員会については、基本的に前回の方法を踏襲したいと考えている。本日配布資料の「豊中市立図書館の運営状況に関する評価報告書」をご覧ください。3ページに豊中市立図書館評価検討委員会設置要綱があるが、次回もこの要綱に基づいて評価検討委員会で外部評価をお願いしたいと考えている。前回実際の状況については、1ページの評価の概要をご覧ください。今回もメンバー構成としては、5名の方でお願いしたいと考えている。図書館協議会から2名、豊中市実施機関から1名、豊中商工会議所から1名、評価検討委員

会で公募した市民公募委員が1名、前回はこの5名体制であった。このうち図書館協議会から出ていただく2名の選出をお願いしたいのだが、前回委員長を務めていただき、アンケート調査の分析等もしていただいた村上先生には、ぜひ今回もお願いしたいと事務局では考えており、また後でご議論をお願いしたい。あと1名の委員には、前は子ども文庫連絡会から1名入っていただいて、図書館協議会から2名という構成となったが、今回は協議会メンバーも変わられたところでもあり、どういうメンバーをご推薦いただけるか、後ほどご意見をいただきたい。豊中市すなわち実施機関からの委員としては、前回同様政策推進部つまり現在の政策企画部から1名と考えている。そして民間からということで、前は豊中商工会議所から出ていただいたが、こちらについては、今回の全体のテーマにも関わって、どちらから推薦いただくのがよろしいかご意見をちょうだいしたいと考えている。そこに市民公募委員が1名加わり、5名の構成となる。

次に評価検討委員会の開催期間と回数については、来年度後半の11月から2月あたりで、前回同様4回くらいを想定している。「評価の概要」の第2節「評価内容」については、①リーディング項目の妥当性の評価、②リーディング項目の達成目標の妥当性の評価、③リーディング項目及び平成20年度豊中市立図書館利用者アンケート調査報告書から見える新たな課題の評価、これらのほか平成23年度からは、④リーディング項目の達成状況についても評価を行うことになる。前は初めての評価ということで、①～③までを中心に評価いただいた。今回は、④を含めてお願いしたいと考えている。

スケジュール案としては、5月から6月に図書館協議会で来館者アンケート等の調査項目案を検討いただき、9月に来館者アンケートを実施し、11月から外部評価検討委員会を開催という予定としたい。市民アンケートについては、来年度については予算要求もしていたが、なかなか図書館単独のアンケートでは予算がつかない。来年度は他部局が外部アンケートを行う予定があるため、そこに相乗りする形で図書館の調査項目を入れてもらうということで調整を図っているところである。なんとかそれで来年度市民アンケートを実施したいと考えている。ただその議論の中で、3年ごとの市民アンケートの実施は経費面で非常に難しく、3年ごとのアンケートで大きな変化が生じるのかという議論があり、なかなか難しいということから、今回事務局からは、6年ごとの市民アンケート調査実施という提案で検討をお願いしたい。ただし、来館者アンケートについては図書館内部で実施できるため、3年ごとの実施を考えている。

次に、アンケート項目について。基本的には前回からの経過観察が必要であるため、アンケートの項目は前回の内容を踏襲することをベースにしたいと考えているが、あらたに追加する項目についての議論をお願いしたい。前の外部評価では、その間の自己点検評価とアンケート調査をふまえ、いくつかの課題をご指摘いただいた。一つは、開館日や開館時間について、アンケート調査からの結果もあり、その時点の状況では十分とは言い切れないのではないかと、課題だと指摘いただいた。それを受け職員提案という形で、地域館4館、岡町・庄内・千里・野畑について全祝日の開館を実施し、改善することができ



た。また、図書館の情報発信機能やPRを強化することについてもご指摘いただき、この間北摂アーカイブスを含め、HPで豊中市に関する新聞記事検索を可能にするなど、その充実を図ってきた。それから前年度の協議会でもご議論をいただいた、課題解決支援サービスについて、図書館としては新たなサービスを掘り起こすことも兼ねて、「住民生活に光そそぐ交付金」を活用して、調べ学習支援・子育て支援及びDV・若年層の就労支援も含めたビジネス支援・多文化サービス・医療健康情報サービスについて、それぞれ各分野に関する資料の充実を行うとともに、関係部局や施設との連携を図る取り組みをこの間進めてきた。その取り組みの一例として、市民の課題解決や調べものの手引きとなるパスファインダーを、現在11種類作成するとともに、またビジネス支援に先日市内企業の紹介と交流を図る目的で中央公民館で行われた産業フェアにも、図書館からもブース出展という形で参加させていただき、図書館でのビジネス支援サービスや広告事業についてご案内してビジネスに関する図書の展示を行った。この時に来場された方からは、「図書館もここまでするのか」というご感想やご意見をいただき、少し手応えを感じているところである。さらに市立豊中病院や男女共同参画センターすてっぷと連携して、医療健康情報レクチャーやDVについての講座等を実施しており、少しずつ連携による事業の推進体制が出来つつある。これらの暮らしの課題解決支援の取り組みについては、「市民ニーズに基づいたものであることが大事」というご指摘を協議会からいただいております、今回のアンケート項目にニーズ等の調査を入れることができないかと、事務局では考えている。

また、市民の関心も高く、いくつかの公共図書館においてサービスが始まりつつある電子図書サービスについても、アンケートの項目を入れることが出来ないかとも考えている。電子図書サービスについては、今の時点では図書館内部で具体的な導入検討はしていないが、今後の図書館サービスのあり方を考える上で、調査の必要があると考えている。

これらの調査項目について、協議会でご意見をいただくとともに、それ以外にも調査すべき事について、いろいろなご意見をいただきたく、よろしくようお願い申し上げます。本日もいただいたご意見および、本日の資料等を見ていただいた後で、ご意見を事務局にお寄せいただければ、次回の協議会で具体的なアンケート調査項目案としてお示しし、そこでご議論をお願いしたいと考えている。

最後に、自己点検の実施により見えてきた課題を一つご報告したい。今日お配りしているリーディング項目の点検を毎年実施するが、これの元になった全項目の評価表、こちらは倍程度の分量があるものだが、そちらを3年に1度実施するという事で、図書館評価システムをスタートし、今年度は3年ごとの全項目評価年度にもあたり、現在実際にやっているところであるが、この全項目評価表は、項目数も多く、それにかかる業務量が大変多いことから、この3年ごとの実施については見直しをしたいと考えている。来年度はちょうどリーディング項目自体の見直しも行うので、全項目の中から必要なものをリーディング項目へ入れていくつもりである。その都度見直しをしながら、リーディング項目1本で当面評価を実施する方向でやっていきたいと考えている。こちらについてもご意見をい

ただきたい。

●委員長

いくつか委員の理解を深めるために、確認をしたいのだが、今いくつか課題を挙げられたが、それらを我々はどの資料を見て読みとっていけばいいのか。

●事務局

アンケート項目についてのいろいろな状況については、基本的には外部評価の報告書「豊中市立図書館の運営状況に関する評価報告書」に記載されている。リーディング項目に対する評価と、アンケート調査に基づき要望の高かったことを、外部評価委員会の中で議論いただき、中項目「市民にとっての質の高いサービスが提供されているか」に、小項目「祝日開館・開館時間」を加えたところや、リーディング項目以外からの評価という項目について、図書館を利用したことのない人への啓発PRということも含め、PRの必要性等のご指摘をいただいている。

●委員長

それでだいたいわかってきた。今5つか6つ言われたこと、それは外部評価並びに自己点検評価を合わせて出てきた、自然に滲み出されてきた課題ということのようだ。

●事務局

はい、3年間の自己点検評価をする中で、そして前回の協議会で討議していただいた課題解決支援サービスの取組みに関する報告にもとづいて、5つの項目について図書館が積極的に資料収集をはかってきました。

●委員長

その5つの課題をもう一度言ってください。

●事務局

調べ学習支援・子育て支援及びDV対策・若年層の就労支援も含めたビジネス支援・多文化共生・医療健康情報支援という5テーマ関連資料の整備である。

●委員長

それらが、これからの重点というか強化課題ですね。

●事務局

これらのテーマについては、引き続き取組みを進めてまいりたいと思っており、市民の

ニーズに合っているかというところをアンケート調査したいと考えている。

●委員長

それと開館時間のことを言われたが、どこから課題が浮上したと言われたか確認したい。

●事務局

開館時間については単年度で変化するようなものではないので、リーディング項目には入れていなかったが、アンケート調査において、やはりご要望が高かったことから、リーディング項目にも入れて、図書館内部で検討をしたということである。

●委員長

委員の皆さん、だいたいこれで資料と事務局の説明について、ご理解いただけただけでしょうか。わからないところは聞いてください。その上で追加すべきではないかという項目や、逆に不要ではないかという項目もあるかと思うので、ご指摘いただきたい。

私は基本的に内部評価システムについては、労働強化にならないようお願いしたいと再三再四言っている関係上、修正されることは構わないと考える。日常業務の中で数字を出すことが非常に余分な仕事になるようなことがあれば、それはバランスを考えて取捨選択をして、項目を減らすことは構わないと思う。そのへんの弾力性を持ってよいのではないかと思う。

ここで委員の皆さんにお聞きしたいのは、もっと重要なことが抜けていないだろうかということなので、アイデア等があれば出していただきたい。このことに限らずご質問やご意見でも構わないので順番にどうぞ。

●委員

図書館評価システムの資料を見ると、リーディング項目として非常にたくさんのデータが並んでいるが、もっとポイントを絞って強化するというのいいのではないか。もちろんこのような一覧性も大事だと思うが、特にこれを重点ポイントとする、というような見え方の資料になると、もっと見やすくなると感じる。

また評価項目の中で、市民ニーズという視点が大事であるとされているが、私自身今回市民公募という形で参加しているが、そういう視点は非常に大事だと思っている。今後もそういう視点で考えてもらえることを切に望みたい。そういった中で先ほどアンケートの話が出ていたが、前回の利用者アンケートのクロス集計にも目を通したが、クロス集計の最後の方のページにある、図書館HPあるいはインターネット予約についての項目が気になった。私は豊中市立図書館のHPを大いに利用しており、またインターネットでの予約も非常に頻繁に利用している。そういった意味合いで、私としては大いに満足している立場だが、このサービスを「利用したことがない」とか、「知らなかった」というデータも件

数としてまだとても多いように思う。それは非常にもったいない。やはりそのクロス集計データに表れた、「利用したことがない」という層と、「知らなかった」という層を減らすためにもPRに力を入れるべきだと思った。「こういうことをやっていますよ」というPRは、もっと強化したほうが良いと思う。その他、市民ニーズというところでは、今後豊中市も高齢化がどんどん進んでいくと思うので、高齢者を対象とするような資料の拡大、あるいはそういう方々が図書館で滞在して利用することのための快適性の維持、例えば椅子の増加とか、そういったことも年々考えていただきたいと思った。

●順番にどうぞ。

●委員

質問の的外れしているかもしれないが、このような機会にぜひ聞いてほしいと、近所の方から聞いてきたことを質問させていただきたい。「図書館で本を借りたいけれども、誰が触ったかわからない本を借りることに少し抵抗がある」という話だった。返却された本をどういう風に処理されているのか、知りたい。

●事務局

気持ちの上で抵抗があるとおっしゃる方もたまにおられるが、図書館では本については、今ほとんど全てラミネート加工をしている。もともとの資料の上に、ビニールのような素材を全部被せており、抗菌コートになっている。ですから余程でない限り、そのコートがかかっているということで、一応滅菌された状態にあるという仕組みになっている。それ以外に燻蒸などについてはしかねるところである。

●委員

そのように伝えたい。

●委員

私は前回の外部評価に関わらせていただいたが、その時に感じたこととして、リーディング項目を非常に多いと感じる。人がたくさん集まって討議して、減らす方向に進めることは非常に難しい。むしろ人が多く集まれば集まるほど、これこれを加えた方がいいと項目は多くなる方向に力が働いていくので、スリム化することが難しい。余程この3年間はここに重点を置くのだと、明確に絞らないと難しいような気がする。一方また項目を増やしてしまうことに繋がるかと思うが、この3年間でいろいろサービスを変えた部分があると思う。先ほどの広域利用もそうだ。その広域利用を例にとると、以前の評価項目では豊中と箕面に絞った取組みになっていたが、今後サービスが変わってくると、そのあたりの項目の見直しも必要になってくると思う。

## ●委員

今回資料の中の平成21年度の図書館評価システム自己点検報告書と22年度分を読み比べると、21年度で改善すべき点が22年度でどうなったのかがすごくわかりやすくなっていると思った。それがいろいろな事情で負担だということはあるのかもしれないが、これを読ませていただいて、毎年こうやって点検することが図書館運営にとってすごく大きな意味があるなら、やはり何らかの形で残していただきたいと思う。項目が増えて大変なところを整理して、ここだけは抜かせないというところだけは毎年やっていくとか、そのへんの仕分けが必要かと思う。そして3年に1回は多くの項目について実施するというような、強弱を付けた自己点検があればいいんじゃないかと思う。

改めてこれらの資料を読んでいろいろ感じたのだが、例えば4地域館の全祝日開館を実施したが、まだ広く認知されていないため、利用人数や貸出冊数の増加には繋がっていないと書いてある。これがPRの問題なのか、要望があってやったのだから、たぶん要望した人は使っていらっしやるはずだが、それが数字として出てこないのはなぜだろうというあたりを疑問に感じたのが一つ。それから今後工夫が思うところでは、e-レファレンスが十分認知されていないというところがある。そこで今日来る前にHPを見たら、調べもののお手伝いをしますという下にe-レファレンスと書いてある。それを市民がパッと見た時に、レファレンスって何かということが分からなくて、クリックしないことが多いのではないかと思った。そこをクリックしたらレファレンスは何かということ、調べもののお手伝いをしますということが分かるのだが、やはりHPのトップページにそれがわかるような説明がある方がいい。全体に図書館はPRが下手だと思うところは、そういうところだと思う。それから自己点検の結果で、中項目の9の「市民との協働事業を推進しているか」という評価ランクが3になっていて、その下から3行目に子ども読書推進連絡会のことが書いてあって、一方で図書館における協働のあり方を共有するために研修を行っていききたいと書いてあるが、ここにもう少し積極的な意味合いが欲しい。たぶん市民との協働ということが図書館から抜ければ、今の図書館ではないと思うので、このあたりにもう少し積極的な何かがあるんじゃないかというふうに思った。子ども読書活動推進計画そのものが根付いてきたことは、市民との協働なくして成り立たないものである。例えば子ども読書活動推進計画とその事業のことを知らない、認知度については80何パーセントの方は名前を知らないという。しかし名前は知らないながらも、おそらくいろいろなところで関わっているお母さんお父さんや子どもさんや地域の人がいる。そう考えると、認知度と実際に関わっていることとの間には差が相当あるんじゃないかと思う。このあたりは数字だけでなく、中身の評価を積極的に行っていただきたいと思った。

## ●事務局

事務局側の先ほどの説明が不足していたために、誤解が生じてはいけなかったので補足させ

ていただきたい。事務局から見直しを提案させていただいているのは、このリーディング項目についてではない。リーディング項目については、毎年度やはりご指摘いただいた通りやっていくことに図書館として意義を感じており、これは毎年度自己点検としてやっていきたいと思っている。見直しというのは、リーディングの前段階として最初につくった全項目の評価についてである。リーディング項目の倍ほどの分量のあるもので、全項目の評価表というのが元々あり、それを毎年度自己評価として取り組むと大変だろうということがあって、全項目については3年度に1回の実施、このリーディング項目については毎年度の実施ということで当初始まったが、実際にやってみると主要なものはリーディング項目にすでに抽出しており、それにさらに加えて全項目の作業をすごく手間をかけて実施よりは、リーディング項目の方をもう少し強化していく方がいいのではないか、という提案をさせていただいた。

#### ●委員

早くに資料をいただいているが深く読めていなくて申し訳ないが、私は学校にいますので子ども達の学校図書館の活用というところから、学校との関わりはどうなっているかなという視点で見た。学校司書との連携ということで司書連絡会が持たれているが、その連絡会で話し合っただけで、各学校でどれくらい反映しているか、申し訳ないがあまり見えていない。そこが見えるような形になるよう、何か考えていただけたらいいと思う。「今日どうだった」と日常の中で聞いているかという、聞けていないと思うし、学校間で随分温度差もあると思う。ブックプラネット事業の進め方などを、学校に帰った時に学校に伝わる形にしてほしい。それぞれ学校司書が個人的には動きを取っておられると思うが、正直見えにくいという印象がある。それと先ほど市民の立場でレファレンスという言葉が分かりにくいという指摘があったが、やはり一般の方にはわからないと思う。学校としては子ども達に、レファレンスというのはこんなことなんだよと日常で伝えていくことが、将来市民として公共図書館を使う時、気軽にレファレンスが利用出来るようになることにつながるという思いで取り組んでいるが、なかなか進みにくい。そういう力を付けていきたいとずっと思っている。限られた視点からだが、そういう意味で公共図書館が調べ学習の支援を頑張っているということは、学校としてはありがたいと思う。

#### ●委員

私も使われている言葉にカタカナが多いので、レファレンスと言われても「なんでしょう」という人も多いだろうと思うが、日本語に正確に訳すとしたら「問い合わせ」になるのだろうか。

#### ●委員長

「調べもののお助け隊」というような感じになるのではないかな。

## ●委員

HP上にも「レファレンス（何々）」と書いてあれば、クリックしやすいかと思う。高齢化社会で、私の親の世代の方がインターネットを使った時に、「レファレンスって何だ？」ということになってしまうといけないので、括弧表記する方がいいかと思う。業界ではそれが普通の言葉になっていても、普通の人にはそれがわからないということだろう。私自身はこういう資料を見て、レファレンスという言葉が自然に入ってきているが、そういう表記を日本語で何とするか、適当な言葉を考える必要が高齢化社会だからという以外に、小学生でもわかるように何か適当な言葉を考えていったらいいのじゃないかと思う。それからあと一つ気になる言葉があったのだが、蔵書が無くなってしまおうということについて、亡失対策を今後見直していかないといけないというくだりがあったが、具体的にどんなことが考えられるのか。本が無くなってしまおうということは、私達皆にとって財産の損失になることなので。それと類似した問題として、資料を借りた時に写真が切り取られてしまっていたりする。これはやはり借りる側のマナーの問題ということに最終的にはなるだろうが、具体的にはどんな風に考えているのか、「考えることが必要である」と書いてあるが、その必要に対して具体的にどんな対策を考えているのか聞きたい。

## ●事務局

その問題は図書館にとっても悩みどころとなっており、千里図書館にはICタグを付けて防止できる装置を付けているが、全館配備というところまでは出来ていない。それよりもまずは、マナーアップについて周知徹底を図りたいということで、各図書館に図書館で作成した何種類かの亡失を予防するポスターを掲示し、例えば外部で古本の市場などに流出しないように、資料には蔵書印とあわせて天印を押すような防止策を強化するとか。それからマナーアップでは、切り取りとか最近の水濡れの本も大変多くなっており、具体的にこのような状態になっているということを現物で実際に展示して、皆さん自身で考えていただくような機会を設けたり、今いろいろと考えて試している。それが100%効果を発揮しているというところまではなかなかいかないので、今後とも工夫をしていかないと駄目だなと思っているところである。もし何かよい知恵があれば、ぜひいただきたい。

## ●委員

私は子ども文庫で手作り工作として、簡単なリサイクル工作を子どもに教えることが多いのだが、現物を見てもらいながら本に載っている設計図と言うか作り方図面を見てもらおうとしても、いっぱい書き込みがあり、それもマジックで線が引いてあるとか、点線をなぞるところに実線を誰かが上から引いてしまっているような場合があって、型紙をコピーするにもその書き込みが邪魔になってどうしようもなくて、結局その工作を諦めざるを得ないということもあった。言い方は気をつけなくては利用者側の感情を損なうことにな

るが、やはり「お互いこういうことはよくないですね」と呼びかける意味で、現物を見せるということには効果があるんじゃないだろうか。実際写真が切り抜かれたページに遭遇すると、その部分が気になる前になぜそんな行為をするのかとショックを受けてしまうのだが、やはりマナー向上というのは、私たち利用者の側も考える必要のある問題であり、私達も何か協力できるのではないかと、この報告書を見て思っている。

## ●委員

最初に市民アンケートについてだが、3年サイクルはなかなか大変だということは、その通りだろうと思う。市民アンケートに限らず、評価結果を整理をしてそのまとめを公表していくというようなサイクルそのものが、3年で行うとするとその評価作りが目的になってしまうみたいなことが起こりかねないという、そういう中で動き出したわけだが、評価そのものと図書館活動が平行に進んでいくという風に考えると、着眼点としては、例えば自己点検の中で4段階評価の中で2という形であがってきたところは、事業がうまくいかなかったという側面と、活動そのものを本来評価の遡上に乗せることに不自然さがあるようなものも、中にはあるのかもしれない。そういう意味では、項目そのものの見直し、あるいは表現等の変化というものをそこから読み取っていくということも必要になってくるかもしれない。評価の低かったところが、例えば一つの着眼点になるかもしれないのではなかろうか。それから他の委員もおっしゃったけれども、新しく取り組まれるようになった活動事業を重点的に見るというのも一つあるだろう。

法律レベルで、こういう図書館評価を積極的にやりなさいとなったのが、2008年の図書館法の改正で、7条の3がこの評価にあたる。そして7条の4が図書館運営に関する情報を積極的に知らせることで、市民が図書館運営に協力するというようなことを推奨している。図書館法第7条は、1は少し別として、相互に関連する項目で出来ている。それで考えると、この21年にやった外部評価、それから22年の自己点検等、こうしたことの中で、評価すること自身が目的ではなく、評価をすることによって図書館の人々にとっては課題が見える。それから市民のユーザーの側からは、図書館の変化なり、あるいはもっと私達がどのような使い方が出来るのかというようなことに期待値として気がつく、伝わるのが大事である。そういう意味では、この一連の評価から報告まとめというふうなものが、それ自身どんな効果や成果を生み出してきているのか。例えば市民に対しては、この報告書自体はどのように目についているのか、あるいは伝えることがどういう風に行われてきたのか。あるいは、大事なものがしまえばなしになっているのではないのかというような、先ほどから出てきているPRにも繋がる話だと思うが、せっかくの評価のまとめがまさに次に繋がっていく、そういうプロセスとして生きるような、そのへんでもぜひ今度の外部評価の中で見ていただきたい。評価に関わる仕事自体が増え、それに追われるのは好ましくないが、これが日常にうまく繋がって行って、やる方も納得できてやりがいを感じられる、そういうサイクルになっていくと一番良い。なかなか言葉で言うように



うまくできるかわからないが、ぜひまだ動き出したというところなので、これ自体の成果・効果についても見ていただけたらいいと思う。

●委員

質問だが、例えばリーディング項目の評価表15ページのリクエスト総数をはじめ、他にもあったが、22年度目標と23年度目標の数字を比べた時に、数値目標が低くなっているように見えるが、具体的にその理由を教えてください。何か図書館としての理由があるのだろうか。

●事務局

例えば5ページのリクエストサービスのリクエスト総数について、23年度の目標が64万件なのが、22年度では70万件になっているあたりのことでよろしいか。この評価自体が、3年後のあるべき姿を設定して、目標に到達するために単年度の目標を立てていく形をとっており、その目標に対する達成度を見ている。リクエスト総数は既に3年前に立てた予想を上回って増えたので、それで途中で単年度として目標を修正していたという形になる。そんな風に最初手探りで目標数値を立てているが、なかなかそれ通りにはいかないものもあれば、逆に到達しきれないので、単年度ではその目標達成は無理であっても、目標を達成できるように単年度目標を少し下げたり、そういう調整をした結果となっている。

●委員

予算の関係も絡んでくるのか。例えば7ページの公民館とか学校幼稚園とかの連携の目標値が下がっているのはそういうところなのか。

●事務局

連携の目標値が下がっているように見えるのは、実際には逆に単年度目標を上げた結果である。最初19年度をベースにして、どのぐらいアップすることを目指すか考えながらスタートしたが、予想以上に連携が進んでおり、それを反映して後から単年度の目標値を上げていったことの結果、当初立てた目標とのあいだに逆転が起きたということだ。

●委員

了解した。  
マイクを持ったついでに述べておきたい。課題解決支援サービスの課題の中に医療・情報サービスがあったが、岡町図書館の医療・情報の分野が本当に充実して、すごく詳しく展開されており、その分野を目的で来館された場合にとっても手にとりやすく、分かりやすくなっている。資料も新しいものが増えている。ああいうふうなところこそ、外部評価が活

きたところのような気がする。そういうのが増えるとすごくいいと思うし、大変評価する。

●委員長

今の説明で皆さんお分かりになりましたか。リクエストサービスなどは、22年度目標値が70万件のところ、既に75万件を突破している。目標を突破しているのに23年度目標ではなぜ64万に下げたのか、という質問だった。今の説明ではまだ十分に理解できないのだが。

●事務局

そもそも19年度をベースにしなが、23年度目標を最初に立てた。単年度ごとに経年変化で組み立てていくのではなく、図書館として3年後のあるべき姿を描いて、その目標に到達するために、単年度ごとの目標と取組みを積み重ねていくということで、まず3年先の目標値というのを立てた。つまり23年度の目標を立てたのは、22年度目標を立てる前だった。19年度の時点でのリクエスト総数を見ると、59万9千4百となっている。リクエスト件数が大きく増えることが良いことだとは必ずしも言えないという議論もあるので、ここから推計して図書館としては、この時点で目標値を64万に上げた。ただ図書館システムの改変とか、先ほどお話に出ていたように、直接インターネット予約ができるようになり、結果としてリクエスト件数が非常に増えたので、3年間の途中であっても単年度の目標数値を上げていったということが表われていると理解していただきたい。

●委員長

では誤解がないように、23年度（当初設定目標）と入れてください。  
で、22年度暫定目標設定とかの説明を入れる必要がある。それを書いてないから、せっかく22年度に目標を達成したのに、23年度では目標をこんなに下げるのか、さぼりたのかというような、いらぬ誤解を招きかねないということだ。

●委員

確かに何もことわりがなければ、これは誤解してしまう。

●委員長

しかもちゃんと目標を達成しているのに、実績ははるかに上のレベルをいつているのに、わざわざ次の目標数値を下げているように見えてしまう。

●委員

23年度と言わずに当初設定目標くらいでいいんじゃないか。このままでは、どう見ても23年度目標が下がるように見える。

●委員長

当初設定した目標でいいと思う。その当初設定目標をはるかに超えてしまっているので、22年度の目標のほうが高くなってしまっているというわけだ。他も全部そういうことか。

●事務局

はい、そうです。

●委員長

では次の議題にうつりたいと思うが、ここまででも多くの貴重なご指摘をいただいた。特に気になるのが、協働事業をもっときちっと評価する形にしたほうがいいという指摘だ。項目が増えるのはつらいと言うが、これは増やしていった方がいいのではないかというご指摘だった。今のところはアウトプット評価になっているが、アウトカムにもう少し近づけるためには、グループの数が増えてきたとかパートナーシップを組んでいる団体の構成員数が増えてきたとか、そういうことを拾い上げることができたら良い。協力していく市民の数が増えるというのは、図書館にとってはすごくいいことだ。それをちゃんと把握して認識していかないと、協働事業をやっていく上でパートナーシップを組む団体に、負荷がかかりすぎるようになってはいけない。一定の団体が何十回も出ていかなければならなくなるのは、なんとかしないといけないと思う。

それから、学校図書館の司書・司書教諭との関わりがどのように評価に反映されるのか、その指標がほしいという指摘。これはリーディング項目の学校との関わりというところになかったか。

●事務局

今あるのは話し合いの数だけで、先程おっしゃったのはそれを学校側に反映するということで、そこまでを図れるような評価項目というのではない。

●委員長

それは学校側で作らなければ仕方のないことなのか。そういう観点から言えば、学校側からこのようにして公共図書館に助けてもらった、というのがデータとして出てくるといい。さっきの相互貸借関係のように。

●事務局

それに近いものとしては、学校から公共図書館へ寄せられたレファレンスの件数というのは評価項目として上がっているが。

●委員長

それは先程の委員の指摘だけにとどまらず、公共図書館サイドと学校図書館サイドで、  
どういう風にデータを組み合わせたらお互いに効果測定が出来るのか、検討課題にしま  
せんか。学校図書館への司書配置とか学校図書館への資料支援や情報提供等々、公共図書館  
では随分頑張ってきたが、そういうことが学校教育においてどういう有効性を発揮してい  
るのかに関しては全然研究していない。それは今後の検討課題にする必要がある。

それから表記の仕方について指摘があった。例えばレファレンスと言われてもさっぱり  
わからないという話だった。ホームページでもレファレンスとなっているのか。

●事務局

括弧表記で調査、相談というのは入れているが、ただご指摘いただいたようにホームペ  
ージのトップページでは、なかなか「eレファレンス」の意味がわかるような形にはな  
っていない。

●委員長

OPACはどういう風に説明するのか。

●事務局

「館内利用者用検索端末」となる。

●委員長

「館内利用者用検索端末」とは、また難しい。

●事務局

「暮らしの課題解決」というような入口も用意している。

●委員長

「ビジネス支援サービス」は辛うじてわかるかと思うが、「多文化サービス」これもわか  
りにくいかもしれない。外国人の方々へとか、日本語の読み書きが不慣れな方へというよ  
うにするとか。「障害者サービス」もわかる。「リクエストサービス」は「資料貸出予約」  
とか、「レファレンス」は「調べものお助け隊」とか、図書館の皆さんで何か楽しいキャッ  
チコピーを考えていただいて、「あなたの調べもの応援します」とか、「団体貸出」を「ど  
っと貸出」とか、「動く図書館」を「おでかけ図書館」とか、キャッチコピーを考えたら  
いいんじゃないか。さっきの「OPAC」を「館内利用者用検索端末」とするのは固い。み  
んなで考えてキャッチコピーを決めて、それを反映していくというようなこともこれから  
大事かもしれない。

それから重要な課題としては、「知らなかった」という人が非常に多かったことだ。「利用したことがない」というのは、「知っていても利用したことがない」ということで、「知らなかった」というのはもっとも手強い敵だと思うので、「知らなかった」の分析をするべきだろう。今日答えは出ないと思うので、どうすれば「知らなかった」を減らせるのか考えたい。調査する時には、まず認知度から始めなければいけないが、その認知度でまず負けてしまっている。その次にはリピーターになってもらい、親和度を上げてもらう。そして絶対にファンになってもらう、支持度を上げていくという戦略があるので、そもそも基本的な認知度で負けてはいけません。勝つためにはどうすればいいのかということを一考えましょう。そのことを積み残し課題として、次に「とよなかブックプラネット事業」の中間報告に入りたい。それでは事務局からの説明を。

#### ●事務局

表紙に太陽マークが付いた資料をご覧くださいながら、聞いていただきたい。前回は今年度読書振興課が所属する生涯学習推進部と、学校教育を主管する学校教育推進部との間で推進委員会を持ち、教育委員会を挙げてこの事業に取り組んでいるということと、人と情報と物流のワーキンググループを立ち上げて、詳細設計について議論を進めているという報告をさせていただいた。

今年度の議論のまとめを12月末の段階で中間報告としてまとめたので、それを本日の資料としてお渡ししている。この資料をかいつまんでご説明させていただきたい。本日はワーキンググループでいろいろ議論をし、固めてきた部分についてご報告をさせていただく。2ページをご覧くださいと、ここでは情報のネットワークを構築するワーキングで、主に学校図書館のシステムについて話し合われたことが書かれている。5回ワーキングを持った。主な議題となったのが、「学校図書館支援システム」いわゆる情報管理および検索のシステムと、それから学校図書館関係者、司書なり司書教諭なりと、公共図書館の司書、そして教員、そういうところがいかに情報共有できるかについて。それからもう一つは、せっかくシステムを入れても活用しないとどうにもならないので、教員を支援するため学校図書館を活用したデータベースをも構築したいということで、その3つが議論のテーマになった。一応ワーキングでは今後の方向性が決まっており、6ページに今後目指したい、学校図書館システムのイメージ図が描かれている。「豊中版」と書いたのは、いわゆる市販の情報管理検索システムを入れるだけだと簡単だが、いかに活用していくかということについて議論しているので、若干豊中オリジナルの部分を備えたシステムが出来ないかと考えているところである。教員・学校図書館司書支援、児童・生徒支援、図書館ネットワークと外部ネットワークという、大きく分けて4つの支援機能が入ったシステムを「豊中版」としてできないかなと考えている。それぞれその中で必要と思われる項目について、例えば窓口業務であれば貸出返却ではこんなことが出来たらいいねという検討を行い、そのシステムの中で必要とされる機能についても資料に掲載している。その中でも特に、オリジ

ナルと銘打つ豊中市独自のものとして考えているのが、教員・図書館司書支援の中に入っている、情報共有システムの機能と活用データベース機能である。活用データベースについては二つのことを考えており、一つにはわりと簡単に先生方に使っていただけるものになるだろうというもので、ブックリストを作りたいと思っている。公共図書館の司書や学校司書の様々な知見を活かし、単元別に活用できる資料を一覧として載せたものをデータベースとして残し、それに対して次に使った人が評価を入れられるようにするというもので、どんどんそのリストが深まっていくというものを考えている。もうちょっと理想的に言うと、そのブックリストの中の本をクリックすると書誌に飛んでいくようなことがあれば、先生方もより資料に対して理解ができるだろうと思っている。授業記録についても、やはり学校図書館を活用した授業を記録するという意味では、ちょっと荷が重いかと思う部分もあるが、そういうものを積み重ねることが出来れば、今後学校図書館を使っていく上でおおいに参考になるものになると考えている。それからもう一つが情報共有のシステムで、これは先ほどある委員が言われた、学校と公共図書館との関係がいかん反映されるかという部分にも関係してくるかと思われる。先ほど言ったように、学校図書館の運営関係者がお互い情報共有出来るようなシステムが出来ないかということで、またレファレンスという言葉を使うことになるが、学校図書館の司書が公共図書館の司書にいろいろなレファレンス・相談業務を行ったものは、今はメール等のやりとりになっているが、そういったものを共通の情報としていけないかということで、電子掲示版の機能があればそれぞれの悩みがみんなの共有の話題や課題になるだろうと思う。それから共有フォルダということでは、学校司書の連絡会で今は図書だよりなどを全部紙ベースでやり取りしているが、共有フォルダに入れるようにすれば欲しい時に見られるようになる。それから図書館利用計画などがここに入ってくれば、またいろいろと活用の可能性が広がると思っている。そういう二つの機能を兼ね備えたシステムが出来ないかと、そういう姿を描いたところである。これについては予算の問題がある。予算の承認がされて上手くいけば、次年度には開発が必要になってくると思う。出来れば来年の1月ぐらいから試運転ができないかと計画している。

続いて10ページには、物流についてのネットワークについての検討結果を載せている。物流についてはご承知のように、既に週1回公共図書館からと学校間の相互貸借資料を学校に届けるシステムをつくっているが、それでは量も十分ではないという課題もあり、さらに先程申し上げた学校図書館システムが入ってくると、学校間の見える化が進むため相互貸借がかなり盛んになってくるものと思われる。必要な資料をいち早く子ども達または必要とする人の手元に届けるために、物流をさらに充実させていく必要があるだろうということで、一定の予算の中でいかに物流を充実させていくかという議論を行った。結論としては、物流の頻度が高くなるのが一番いいという話になっているが、そういうことについて議論をしていった。それからもう一つが今後学校同士で相互の見える化が進むと、学校の資料費総額の活かし方、本の購入の仕方等についてもどのようにすればよいか、と

ということについて話し合いをしている途上である。学校にとっては、各学校共通して持っているもやはり必要な資料もあるし、一方でやはりお互い見える化が進む中では、学校の特色が少しずつ出るような蔵書構築が出来ればいいということもあるので、このあたりの話についてはまだ結論が出ないところではあるが、こういったところについても今議論を始めているところである。それから図書の購入についても、今後はデータを付けた形での購入になってくると思われる。バーコードを装備した状態で購入することになるので、図書購入についてもより良いシステムが出来ないかと、今議論を深めている。

それから三つ目の、人のネットワークについては、17ページを見ていただきたい。これについてはブックプラネットの動きに合わせながら、今年度少しずつ着手しているところで、ブックプラネットを主管している読書振興課と、学校図書館教育を進めている教育推進部の小中学校グループという名称が変わったが、その双方の連携それから研修を担う教育センター、その三者の連携を深めながら研修を充実させていきたいということで、今年度司書教諭を対象に2回、それから管理職、司書教諭、学校図書館専任職員（学校司書）を対象とした研修を2回。その他の8月9日については、だいたい10年目くらいの、ほぼ学校での経験が出来てきた先生方に対する研修として教育センターが打った研修だが、そういったところで、昨年概念設計の中で課題になった、学校図書館の位置づけとか意味合いや役割というようなところについて、再度認識を深めるために、それから言語活動の充実に向けて学校図書館をいかにして使っていくかというあたりを焦点とした研修を行い、内容の充実を努めているところである。それからもう一つ学校司書の連絡会については、月に1回行っているが、学校司書だけの情報交換会になっていたものを、せっかく読書振興課が出来て公共図書館と学校司書が同じ所属になったので、公共図書館の司書の側からも出席して、公共図書館側の情報も流し、公共図書館司書も学校の実態や、学校図書館へ提供した資料がどのように使われているかということも含めて、実態を把握するような形へと、双方向の情報交換ができるように進めている。

もう一つ今年度については、ブックプラネットの情報発信ということで、中間フォーラムを12月9日に開催した。その記録については18ページのところに報告を掲載している。当日は141人の保護者、市民、教職員と市関係者が参加した。フォーラム後のアンケートで、ブックプラネット事業の目指す方向が理解できたかどうかについてお聞きしたが、19ページにあるとおり、保護者、教員等には概ね理解が得られたが、やっぱり市民の方には十分な理解がまだ得られていないというところもわかった。そういうあたりの原因や理由については、ご意見をいただきながら分析をして書かせていただいている通りである。それから参加者からいただいた意見から見える成果と課題についても、21ページのところから記載しているが、今回中江有里さんという、女優であり作家でもある方をお呼びしたので、その方のお話もかなりインパクトが強かったようで、いろいろなご意見をいただいて、それをまとめさせていただいた。これはまだ中間報告で、ここに書き込めていないものがあるため、それらまだ書き込めていない部分を含めて最終的な集約まとめを

している。3月の段階では、今年度の詳細設計の最終報告という形にして、一定のまとめとさせていただきますと思う。

次年度の取組みでは、予算の承認を得られれば、一番大きなお金がかかるところはネットワークの構築をしていくことになるが、それから物流の充実も具体化していきたいと思っている。ということで次年度は具体的に環境の充実を図っていくことになるが、そういった充実が出来た段階で課題になってくるのは、その充実させた機能をいかに継続的に充実発展させるかということと、いかにそれを使って図書館教育を発展させていくかということが課題となってくると思う。そういう観点から他市の先進事例を見ていくと、そのような統合的な支援ということで「学校図書館支援センター」を作っておられる事例も聞いている。この支援センターをどこに置いているかということ、公共図書館に置いているところもあれば、教育センターに置いている市もあって、市によって様々な取組みがあるようだ。次年度推進委員会の中では、このあたりが重要な課題になってくると思っている。時間はあまりないが、本日お集まりの委員の方からもいろいろご意見やご指摘をいただけたら、更に充実していこうと思っており、よろしくお願ひしたい。

●委員長

それではこの件につきまして、ご意見を順番にいただきたいと思う。

●委員

13ページと14ページで、物流に関する認識調査というところで、先ほど頻度や量の優先順位が高いということだったが、これは具体的にはどのような方向性で解決をされていくのだろうか。

●事務局

はい、実は先ほどは十分に説明が出来ていなかったが、現在週1回物流便が学校に届くが、だいたい50冊くらいが入る箱一箱分が制限となっており、そういったところで頻度と量が大きな話題になっている。次年度につきましては、まずは頻度を高めたいという希望が高かったので、頻度を高めることが一つの大きな目標になってくると思っている。そのなかで出来れば量についても、もう少しカバーできたらいいと思っている。

●委員

では公共図書館と小学校あるいは中学校間の物流に関しての話か。

●事務局

はい。今はシルバー人材センターに委託して、実際に動かしているところである。



●委員

その台数は豊富にあるのか。

●事務局

台数は1台で週1回ずつのコースがあり、このコースに入っている学校を順番に周っていくという形で届け、さらにそこから本を積み込んでくるという作業をしている。今は岡町図書館に集積場所があり、そこに一旦全部が集まり、次の日に決まった学校の箱を持って物流便が動いていくという形になっている。

●委員

公共図書館の中なら、1台で対応が可能かもしれないが、小学校と中学校も入るとなると非常にたくさんの拠点数になるので、1台ではおのずと限界があると思う。例えば民間業者への委託で、宅配会社とかあるいはトラック会社等々、自前でやる必要はなくて、必要に応じて物流は民間に委託してもいいんじゃないか。そうすれば頻度とか量の課題が解決していくのではないかと思ったが、もちろん予算に限りがあるのかもしれないが。

●事務局

そちらについては一定視野に入れているが、今シルバーに委託してすごくサービスしてもらっている点は、学校図書館まで届けてもらう形になっているところで、民間になるとそういった部分で難しい部分が生じるかなということと、学校内に入っていくのでセキュリティの問題もある。シルバーでは今二人の方が運んでいるので、一定の安心感があるのだが、そういったところも合わせて考えていく必要があるかと思う。

●委員

それでは活用データベースについて。6ページのところに、「活用データベース」と「授業記録のブックリスト」と2つ並んでいるが、授業記録はどういうふうなものになるのか。

●事務局

理想とするのは、学校図書館を使って行った調べ学習の、トータルな記録が入ったデータベースである。7ページのところにデータベースのイメージが書かれているが、単元とかねらいから、どんな本を使ったかの記録、授業を振り返って担当教員のコメントとか、公共図書館の司書からも資料提供側の感想も入った、授業の総体の流れがわかるようなもの、出来れば活用した資料の記録もそこに入れていけばいいかと考えている。東京学芸大学が先行的にやられているので、そこを目指しているが、ただあそこまで研究的な形で追求していくと敷居が高くてなかなか集まりにくいかと思っている。

●委員

これは誰が記録をするのか。

●事務局

そこもまだ今後の議論になってくると思うが、先生方とそれから学校司書の協働のもとで作成していく必要があると思っている。実は司書が数年前に紙ベースで授業記録というのを小学校と中学校別で作っている。そういった実績もあるので、それらを先に入れながらと考えている。

●委員

もう一つブックリストについてだが、先ほどいろいろな人がその本について評価をしたりすることが出来れば、という風に言われたが、なかなか文章で書くとなると時間もないということもあると思うので、例えば今 SNS なんかで行われているような、「いいね」というボタンを1つ押すだけで参加が出来るというような工夫で、それに参加できるような仕組みを作っていただけるといいのではないかと思う。

●事務局

それについても説明不足で申し訳ないが、8ページを見ていただくと、これはブックリストのイメージだが、下にコメント欄を設けていろいろな方がコメントを書くことができるようにして、右側には評価欄で○△×をプルタブで選べて入れられるように出来たらいいなと考えている。

●委員

なかなか×を入れるのは難しい気はするが、おおよそのイメージは理解できた。

●委員

ブックプラネット事業に関しては、ここまで細かく中間報告をまとめた読書振興課のほとんどが生涯学習、図書館関係の職員で、すごく大変だっただろうなとまず思った。学校現場にほとんど毎日のように出かけているということを知り、随分大変だったろうと思った。そのように思うのは、1ページに「生涯学習推進部と教育推進部の連携を強化し」と書いてあって、実際にワーキングのグループもそのような体制になっているが、やはり学校現場で、図書館を活かして学校教育をどう豊かにするかという意気込みとか志というのがまだなかなか見えてこない。そういう意味での停滞がかなり長かったので、現場から湧き上がってくるものがあってこそシステムが生きてくるし、そのシステムが出来たら現場が豊かになって、更にシステムがよくなるという良い循環を生んでくると思うが、そのあたりが今の読書振興課の生涯学習の職員の努力を思うと、バランスが欠けているのではな

いかというところが心配と言えれば心配だ。

表紙にブックプラネット事業の壮大なイメージが描いてある。「児童生徒が自分を取り巻くさまざまな本と出会い輝いていくことをイメージしています」という。このブックプラネット事業というのは、子ども読書活動推進事業とはまた違って、学校図書館と公共図書館の連携のもとに、やはり学校教育が豊かになって、子ども達の豊かな育ちを支援するという大きな目標設定があると思う。「様々な本と出会い輝いていく」ということはもちろんだが、そこに人が介在して豊かな学校教育の中で、さまざまな本と出会い輝いていくというような、このブックプラネット事業の特徴である、「学校教育にどう活かすか」という視点がちょっと欠けているなと感じた。壮大だけれども、ちょっと本との出会いだけに絞りすぎているなと、改めてこれを読んで思った。やはり学校教育の中で授業に活かすところを、この中間報告でもやはり大きな目標としてどこかに書いていただきたい。概念設計に基づく到達目標実現に向けてという、到達目標の実現そのものの記載がないのはいか。ブックプラネット事業は何のためにあるのかという、そのこのところを毎回毎回挙げていただきたいと思う。それと、本当に現場の先生方の協力や教育委員会の熱意を持って、これが実現されていかなければ駄目なんじゃないかなと強く感じた。

それからもう一つ。3月11日の地震を経て耐震構造の問題が再浮上し、同時に学校図書館の改造・改築という問題はかなり長い間されていなかったが、また取りかかることになるかと思う。行政の縦割りの仕組みから、ハードとソフトのつながりがどうなのか気になる。ブックプラネットの方が必ずソフトのところに関わって、未来を見据えた学校図書館の設計となるように、ぜひしていただきたいと思う。特に大規模校になると、今まで言われた2教室分ではこのブックプラネット事業の目標からみても、足りなくなる可能性が出てくると思う。ですから積極的に関わって、予算の問題もあるだろうし、いろいろ問題があるだろうが、ぜひここで頑張ってもらいたいと思う。ブックプラネット事業が関わってソフトを豊かにする、設計するところをより意識していただきたい。これは行政全体の目的のために横で繋がるという、そういう問題も絡んでくると思うので、そこを特に希望する。

## ●委員長

私は概念設計の時からこのとよなかブックプラネット事業の委員として入らせていただいているが、本は好きなのだが、全く図書館に専門的に関わったことがないので、きっとこのなかでは素人だと思う。素人だけれども、学校にいるという立場でこの事業に関わってきた。先程の、公共図書館の自己点検評価についての文章を見せていただいても、やはり公共図書館が活性化されて市民のものに本当になっていく、その一番の元は学校図書館が担っているのではないかと思っているので、学校としてこの事業が本当に根づいていくということが一番の近道じゃないかなと思うようになった。なかなかこれをやっていこう、こうしたらいい、ああしたらいいと思いながらも、先程言われた予算であったり、大きな

壁が次から次へと立ちはだかり、なかなか理想通りにはいかないが、その中で本当に読書振興課も中心となりすごくよく動いてくれて、ここまでの成果が中間報告となっているのだが、動きだしたという感じがしている。やはり学校の子供達は将来市民となっていくので、公共図書館を上手く使えて生活の一部としていくことが一番だと思うので、子供達をどういう風に取り込むかということが大切だと思っている。やはりこのブックプラネット事業でも、アピールするという点ではちょっとなにか硬い。もっとわかりやすさとかとっつきやすさとか、そういったことでアピールができれば、もっと教員も取組みやすいし、市民の方にも分かりやすいと思う。そのへんの工夫が今後必要なんじゃないかなと思う。せつかくいい設計をしているわけだから、それがどういう風に実際に使われていくかという、その部分がこれから大事になってくるんじゃないかと思う。

#### ●委員

先程のご意見に乗っかる形になってしまうが、「フォーラムを通したとよなかブックプラネット事業が目指す方向の理解の深化について」のところの項目で、そこには「よく理解できた」「まあまあ理解できた」というグラフになっていて、「よく理解できなかった」「全く理解できなかった」というのもやはりあるわけで、この事業も回りまわると市民への行為だと思いますので、全く関わりのない人に伝えるのは結構時間がかかって難しいと思うが、出来るだけ取りこぼしのないように伝えていく努力を、引き続きしていただかないといけないと思う。「わからなかった」「ああそうですか」ではいけないと思うので、地道にわからない人でもわかるように努力をお願いしたい。

#### ●委員

さっきの発言の中で言われた、そもそもこの事業の狙いは何かという、そこは大変大事なところだと私も同感する。この事業は、フォーラムもそうだったと思うが、もともと一つには「読書活動日本一」という市長さんの出した目標があった。そのことと、それから学校図書館が豊中の教育を問うというところでどういうふうに絡んでいくのか。そして図書館の活用ということを通して、図書館を使うために図書館をという話ではなくて、豊中の望ましい学びの実態をどう創っていくのか、そのところに図書館がどう関わりうるか、関わっていけるような図書館をどうするかということが基本のところにあるはずだ。それと「読書活動日本一」にどう繋がっていくかというところで、これは言葉の問題だけではなくて、内容的に工夫の必要なところだと思う。「読書活動日本一」はともかくとして、やはりもう一つの「教育を創る」というところに、学校図書館を絡めながら整備をしていくというところを狙いにしていこうとしていると、一応理解をしておいた方がいいと思う。そういう点から見た時に、ソフトの面として先程施設の問題に触れられたが、まだどなたも触れられないのが、ポイントになるのは人の問題だと思う。さっき授業記録の話の時に、東京学芸大学の資料を参考にしたと事務局も言われたが、東京学芸大には附属の小学校が

あり、一つの組織の学校という特性があるのと、あそこにはやはりプロと言っていい司書が継続して勤務をして、そして教師と一緒に授業を作る、あるいは教師に対してかなり積極的に、司書として専門家としての働きかけができるというなかで、この授業記録作りが出来てきている。というと8ページの、さっき質問にもあったが、授業記録を誰が作るのかという問題、各年度各校1つを作成することを目標とするという。せめてそのへんからいきたいという気持ちはわかるが、各学校一つはうちの学校ご推薦の記録を出すみたいなお話になってくると、これは授業記録作りが恐らく創作になってしまうという語弊があるが、本来は作ること自身が励みになり目標になるという、あくまでそういう教育実践の成果が上がって、授業記録になるというのが本来のあるべき姿だ。だから一つでないといかん、どの教科から出すか、どの学年から出すか、教科や単元が分散するのが望ましいという注文がついてくるから、例えばこちらは1年からで、こちらは6年から出すというような感じで作ること自体が大変だと、それ自体が目標になりかねない。決してそういうものになってはいけない。決してそういう風なものになってはいかんと思う。そういう意味では、やはり地道に実践記録作りが授業を作るというよりは、授業作りの実践が授業記録を成果として生み出し、そういう記録自身がより良い授業実践の資料として活用されていくという、そういうサイクルになるのが一番望ましい。そうするとここで基本になるのは人の問題で、豊中の学校図書館作りの中で人の問題も随分努力されてきているけれども、より良い教育を教師と一緒に作るという、学校図書館像の問題として、そのところがこのなかで追求されていくべきだと思う。そこまで書く予定は中間報告ではなかったかもしれないが、明らかにそこに課題があると思う。今日まだ事務局が説明されていない資料で、学校図書館担当者についての資料がある。だいぶ細かい字だがよくまとめられていて非常に参考になりそうだが、学校図書館の人の面で比較的進んだ自治体のいくつかと比較されて出ている。これを見ていて、よその情報は出して自分のところの情報は出さないのかなと思ったが、要するに学校司書について、岡山とか他のところではその人達がいくらお金をもらっているとか書いているけど、箕面もそうだが待遇が出てこない。それは書きにくいのか、あるいは出す機会がなかったのか。要は、人の問題というのは金の問題だから、それだけ難しい問題なのだが、岡山市の場合では正規職員と臨時職員とで言えば一旦は正規職員として流れていった。その後自治体の合併や財政状況で、正規職員が抜けるとあとを臨時で埋めるというような感じで、逆の流れもあるのだが。そういう人の配置の面で、一番良い形を取っているのが岡山市の場合だ。それに比べて豊中と箕面市は、並んで随分努力されてきたけれども、正規の職員ではないのはご承知の通りだ。で、やはり3年とか4年という任期を持った人達が仕事をどうするという限りにおいては、教師は一応期限付きではないので、プロとして授業を作ることをして、その人と組んで授業を作っていく。そういうことを推進する元になるようなブックプラネット事業にしていくのであれば、入りにくい部分だけでも、視野の中には置いて考えていく必要があるのではないかと指摘しておきたい。豊中の司書の置き方というのは、いくつかのモデル校のところ

から入られたと思うが、もう一步踏み込んだ形の、教育に関わる授業を作るプロとしての司書というのを、このブックプラネット事業の中で一つの形を作っていくというあたり、そういう司書の問題が今すぐの課題になるかどうかは分からないが、そのへんまでを見通しておかないと、このブックプラネット事業のイメージ図自身が完結しないのではないかと思う。なかなか難しい問題だと思うが、一番基本のところだという感じだ。

### ●委員長

とよなかブックプラネットについては、これはまだ中間報告書であるので、今日いただいたようなレスポンスをお返ししたが、これらも活かして最終報告書にさせていただいたら嬉しいと思う。総括しますと、ハードとソフトの話が中心だったと思う。物流は事実上ハードだ。学校図書館システムが入って、物を運ぶということはハードだ。先ほどのウェブとか、システムソフトの整備など電子的な話にすぐ進んでいくけれども、実は学校図書館と授業とがどう関わっていくのかというのが、学校教育サイドからの要望としてこの報告書に出てこないのが私はちょっと意外に思っていて、こんなもんなのかなと思った。現場からこんな学校図書館であってほしい、こんな風になってほしいんだというのがあるんじゃないのと思った。それがもうちょっと欲しいなというのは僕の感想である。それと司書側から、こんな風な図書館になって資料を使った授業構築が出来ますよという、そういう投げかけみたいなものも議論されたのかなと思ったが、そのへんが見えない。当然そんなことは終わっています、専門家同士の会議ですからということならば、私は引き下がるが。意外とそのイメージが大事ではないかなと思うがどうか。小学校の低学年向け、中学年向け、高学年向けとか中学校向けとか、少しずつ使い方が変わってくるだろう。あくまで素人として意見を出しているので、そう思って聞いてほしいが、私が小学校の時に図書室というのがあったが、誰もその使い方を教えてくれなかったので本の倉庫だと思っていた。一部の人間は借りていいと思って出入りしていたようなのだが。すごく損した感じがある。中学校の時には図書室があって、司書の資格を持っている先生がいて、そこで本の読み方とか借り方とかを教えてもらって、一気に読書家になった。これは人生における決定的な差だと思う。ものすごく決定的な差だと思う。小学校の時にはごくわずかな人しか触れる事ができない場所で、図書室の先生というか、当時はボランティアだと思うが、その人と友達になれた連中は読書家になれたが、それ以外の人間は縁がなかった。そしてシステム化もされていなかったなので、私はごく一部の本好きの人の集まる変わったところだと思っていた。ところが中学校では、均等平等にその機会を与えられて、嫌でも図書室に1回は行かなければならないような授業があったので、行ったとたんその蔵書に魅了されてしまって、それから本好きになったということを知っている。そういう点からいうと、いかに子どもを本に近づけるかということがとても大事だ。授業体系はどうなっているのかとか、そんなこともこのブックプラネットの中で現況を明らかにしてもらえないだろうか。現状はどうなっているのか。そうしないと、司書とか司書教諭の配置がいかに大事なことから

いうことについて、学校サイドの支持が得られないと思う。市民サイドの支持もやはりそこから生まれると思うので、そのあたりの記述がもう少し欲しいと思う。ちょっと内容が乾いていないかという感じだ。システムばかりで、乾いているなどと思った。ほんのちょっとでいいから入れてほしいと思った。

では積み残し議題に戻るが、先ほどの評価システムの委員を協議会から2名出さなければいけない。まず村上委員にそれとなしにお願いしますという雰囲気になっているが、改めて正式にお願いしてよろしいか。では村上委員がお一人。そしてもうお一人は、前任者の後任ということで松田委員にお願いしてよろしいか。

#### ●委員

勉強させていただきたい。

#### ●委員長

ありがとうございます。これで決定した。それではお二人に評価委員をお願いします。その他何かございましたらどうぞ。

#### ●事務局

資料として「豊中市子ども読書活動推進計画第2期実施計画」の「平成22年度事業実施報告書」という黄色冊子を配布させていただいた。この件について少し説明させていただきたいと思う。この「子ども読書活動推進計画」については、平成17年の3月に推進計画、翌年8月に第1期実施計画を策定しまして、これらの計画を踏まえて子ども読書活動の取組みを進め6年目を迎えている。昨年度については、評価報告書や第2期実施計画の改訂を行いながら、同時に子ども読書活動の推進事業に取り組んできた。

今回平成23年度のワーキング会議の委員を中心として、22年度分の事業実施報告書を作成したので、大変遅くなったが図書館協議会の委員の皆様にご報告を兼ねて配布をさせていただいた。この報告については前年度の取組みを振り返り、その実施内容を広く情報提供するために、18年度より毎年作成しているものである。22年度については2回の地域交流会や子ども読書マップの取組みなど、160の事業に取り組んだ。それぞれの取組みについては、回数や参加人数だけでなく、関係部局や団体の方に記入をしていただく際に、事業に参加してこう変わったというような、気づきも含めて記入していただくようお願いしている。また写真を含めて子どもの読書活動についてご覧いただけるように、後半部分に子ども読書活動ピックアップといったページで、今回7つの取組みを取り上げている。昨年度につきましては、評価報告書の作成や第2期実施計画を策定する中で、第1期実施計画からの課題を認識し、それらを踏まえて取り組む1年になったと考えている。次年度は第2期実施計画の3年目となり、引き続き取組みを進めていく予定であり、子ども読書活動の推進につきまして、ご理解ご協力をいただきますようお願いいたします。

●委員長

この件に関して何かご質問、ご意見をどうぞ。

●委員

6年目に入って、すごく定着してきた感があるが、ここに関わっている市民の方の努力もすごいないつも思っている。6ページの1から6を見ると、子どもが読書にかかわるその様々な場面が1から6なのですが、ここが子どものそれぞれによって、遊びながら本に触れたりとか、様々な本との関わりがあると思うが、それぞれが活かされていてとてもいいなと思った。これが「読書活動日本一」という豊中市の大きな目標にとっても、すごく貢献しているのではないかという風に思った。

●事務局

資料のご説明が抜けていた部分を補足させていただきたい。A3の両面1枚ものの資料は、各市の学校司書の状況と司書教諭や学校図書館担当教諭の状況を表したものである。そして、豊中ではとよなかブックプラネット事業のプロジェクトを24年度までということで行っているが、各市のHP等で公表されている考え方等を拾い上げて整理したものになっている。ブックプラネット事業が24年度までのプロジェクトということもあり、それ以降の恒常的な状態を、どのように維持するかという具体的な検討を今後していかなければならないので、その為の一つの資料と思ってまとめかけたものである。他所を調べるのに夢中になって、豊中市の情報が少なくて申し訳ない。

す

●委員長

それでは以上で第3回の図書館協議会を閉会しますが、いつもの通り傍聴の方から何かご意見、ご感想をいただきたい。

●傍聴者

私は横浜の専修大学に勤めております。豊中市とはあまり関係はないが、今日は図書館協議会の役割を考えるために、私自身も地元で図書館協議会に関わっており、参考にさせていただければと思って参加させていただいた。貴重な機会をいただきありがとうございます。公開性についての委員長の講演を聞いてすごく感銘を受け、それで今回このような形で参加させていただいた。本当に傍聴させていただいて、公開するという事はすごく大事だと思えることが出来て良かった。

●傍聴者

今日の委員さん達のご意見を聞いて、やはりすごく勉強になると思った。よそに勉強に



行くより、ここが一番の勉強の場だと思っている。いろいろな視点で討議されて、私が見落としていたものがいっぱい浮かびあがってきて、こういう風に一生懸命考えていたけれども、こういうことが抜けていたと気付いたり、すごく良い勉強の場になっている。それから先ほどどなたかがおっしゃったが、この岡町図書館の2階の医療健康情報コーナーのことだが、これもこの協議会の傍聴席で2年前に発言させていただいて、自分自身の体験からこの医療の資料がお粗末だということを申し上げた。それが今年から非常に充実した医療健康情報コーナーになった。とてもわかりやすくなり、本当に嘘のような感じをしている。私も今また新しい病気のこと、そこをしょちゅう利用しているのだが、テーマごとに分かれていることと、それから新しい本が入ってきたこと。これはお医者さんから言われている。本を見るのなら、医療の本は絶対新しくないと駄目だと、私が癌で掛かっていた時にいつも言われていた。それが2011年11月の本も含め求める本がもう既に入っている。いつもあそこへ行くと感動する。そこには常に目的を持って来られる人がたいていいらっしゃる。自分が調べたいことを丁寧にあたっておられる。そしてもう一つは、職員がフロアワークのためにさりげなくおられて、よく利用者が職員さんに尋ねている姿を見る。これも私が岡町をしょちゅう利用していながら、あまり体験したことのないことだ。職員に「見やすくなったね。」と言うと、「そうですね。そう言っただくと嬉しいです。」と飛びついてこられた。そして「みんなでどうしたら見やすくなるか考えたんです。その点を見てくださって嬉しいです。」と言われた。医療健康の分野の貸出も増えていると聞いた。市民が要望してそれに応えてくれる、そして市民が要望を伝えやすくなる。そういった日常の図書館サービスの質の向上が、豊中全体のシステムの発展になっていくのだと思う。

先ほどのブックプラネットのシステム作りについても、本当に努力していただいているが、やはり学校の子供達や先生達が図書館を使ったからこんなにいい授業が出来た、子供達が学びが楽しくなった、そして保護者が豊かにいい教育をしてもらっているというそういう実感が上がってきて、初めてシステムが発展していくものだと思う。先に言うのを忘れたが、ここまでシステムを作られることについては、私達市民の会として20年間学校図書館のことについては課題を指摘し提言してきた身としては、それだけでも感謝をしているのだが。やはり現場が豊かになる、豊かな学校教育になっていくということが目標であることを、きちんと目標として念頭に置いてシステムを更に発展させていただきたいと思う。

#### ●委員長

とても素晴らしい勤務評定をいただいたが、これで終わらせていただいてよろしいか。本日はお疲れさまでした。